

「音と映像というデジタルな手段を、ライブというリアル空間で体験として共有する」

trialog vol.3「SOUND, SPACE & UNIVERSE(S) 音と視覚のさまよえる宇宙」開催

ワンオートリックス・ポイント・ネヴァーのダニエル・ロパティン氏が登場

時間と空間を越境して紡がれる音楽と映像とは

『WIRED』日本版の元編集長でありコンテンツメーカー「黒鳥社」を立ち上げた若林恵がソニーと仕掛ける新プロジェクト、「trialog」(トライアログ)が、第三回となるイベント、trialog vol.3「SOUND, SPACE & UNIVERSE(S) 音と視覚のさまよえる宇宙」を、2018年9月13日(木)、渋谷区神宮前のコミュニケーションスペース「CASE W」にて開催しました。



「trialog」は、「What is the future you really want?(本当に欲しい未来はなんだ?)」を合言葉に、毎回設定するテーマに対して、様々な領域で活躍するクリエイター、エンジニアやアーティストなどの三者が、対話を通じ異なる立場から意見を交わすトークイベントです。

第三回の開催となった今回の trialog vol.3 では、「SOUND, SPACE & UNIVERSE(S) 音と視覚のさまよえる宇宙」をテーマに、スペシャルゲストとして、名だたるアーティストとコラボし革新的な音楽作品とパフォーマンスで世界中を魅了する音楽家、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー (Oneotrix Point Never) のダニエル・ロパティン氏を迎え、トークを行いました。さらに、彼のパフォーマンスをビジュアル面から支えてきたアーティスト、ネイト・ボイス氏、SF 作家の樋口恭介氏、「trialog」の共同企画者で Enhance 代表の水口哲也、(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズの浅川哲朗など、アーティスト、クリエイターたちによる計3つのセッションを通して、〈表現者〉たちが描き出す「音と視覚の宇宙(=ユニバース)」に迫りました。

「trialog」は、今後もテクノロジーとクリエイターが会う、次世代の価値創造の機会となるプラットフォームとして定期的に展開していきます。これからの活動にご期待ください。

○About trialog

■trialog Twitter アカウント:

@trialog_project (https://twitter.com/trialog_project)

■trialog WEB サイト:

<https://trialog-project.com/>

■trialog コンセプトムービー: <https://www.youtube.com/watch?v=QjJW5ECNQtw>



■ トークイベント内容

SESSION1 【視覚と聴覚をグルーブさせるためには | In the Groove of Sound and Vision】

SESSION1 では、彫刻や変形スクリーンや映像を取り入れた演出でワンオートリックス・ポイント・ネヴァーのパフォーマンスを支えるビジュアルアーティスト、ネイト・ボイス氏と、Enhance 代表の水口哲也、(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズ プランナーの浅川哲朗の3名が登壇し、音楽の中での〈映像〉について議論を深めた。

水口は、「古くは100年以上前のアーティストが頭の中で描いていたことを表現する方法は、当時は限られていた。けど今僕らは映像や音を融合させて、それを立体で、VRで、ARで、MR(Mixed Reality、複合現実)で、つくれるかもしれない。今我々は、将来的な〈音楽を観る体験〉の手前にいる」と持論を語った上で、「テクノロジーが発達する中で、この先はどういう表現をしていきたいか?」とネイト氏へ質問。その質問に対してネイト氏は、「次のステップとしては、処理したものを再度開発していくこと。どこにスポットをあてるのか、物と物にどういった関係性があるのかを改めて考えていきたい」と回答。さらに水口から「未来のライブ空間、テクノロジーを考えたとき、本当に欲しいと思っている技術や表現は?」と問われると、ネイト氏は「長い間やりたかったことを、今回の『MYRIAD』で実現することができた」と自らで評しながら、「彫刻などを用いた劇場のようなプロダクション、劇場のような表現にも興味がある。」と話し、「映像や絵画のような2次元的なものから、彫刻のような3次元的な、物理的なものまで、幅を広げながらそれらを統合していきたい」という自身の表現の未来も示唆していた。



SESSION2 【「MYRIAD」という幽玄な世界の秘密 | Special Presentation from “MYRIAD”】

SESSION2 では、ニューヨークとロンドンで大成功を収め、9月12日に日本でも開催されたワンオートリックス・ポイント・ネヴァーの最新コンサート「MYRIAD」の全容について、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァーのダニエル・ロパティン氏と、ネイト・ボイス氏が特別プレゼンテーションを行った。

ダニエル氏は、「MYRIAD」のコンセプトが生まれるきっかけについて、「劇場やオペラのようにエレクトリックミュージックを表現することに関心があった」と話した。「これまでの多くの場合私たち二人がスクリーンの前に立って、後ろに大型の長方形のスクリーンがあってというような設定で、そこでネイトが、私が恐怖を感じないように空間を埋めるものだったが、プロジェクションの裏にあるスペースに関心を持つようになってから、シアターのようなレイアウトの中で体験を提供できるようにした」と語った。続けてネイト氏は、「MYRIADは、スクリーンの後ろに照明があることが興味深い」と話し、「通常は空間には終わりがあるが、それがわかると圧迫感があって、不快になる。」と空間に対する考え方を話した。重ねてダニエル氏は、「音楽の力は雰囲気として〈錯覚〉を演出すること」とし、「直観的な錯覚を生むこと。錯覚をできるだけ面白くすることが僕たちの役割。よりインスタレーションなものをつくりたい」

その後、MYRIADで実際にネイト氏が使った映像や、その解説が丁寧になされ、会場に集まった参加者は前のめりで見入り、聞き入っている様子であった。

さらに若林から寄せられた「ダニエルの音楽とネイトのビジュアルがフィットしないことが起こったりするのか?」との質問に対してダニエル氏は、「逆にフィットしてほしくない。あまりにもシンクロしたものを作ることに恐怖がある。必ずしもハーモニーである必要はなく、創造的な破壊や合致したりしなかったりするのが面白い。そういった意図を持って、オーディオとビジュアルを作っている」と、音楽とビジュアルとの関係性を語った。



SESSION3 【多層的／複数の宇宙を巡って | All Over the Universe of OPN】

SESSION3 では、SF 作家で、ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー『Age Of』歌詞監訳も行っている樋口恭介氏、ダニエル・ロパティン氏、若林恵が、SF の視点を交えながらワンオートリックス・ポイント・ネヴァーとその音楽について対話を行った。

まず樋口氏から、自身のアルバム『Garden of Delete』の構造について質問されたダニエル氏は、「フランケンシュタインの怪物はぐちゃぐちゃなものが合わさってクラシックな存在になっている点が興味深い」とSF 的観点を説明。続けて、「それと同じように自分の音楽も色々なものをミックスして作っている。だがそれは何かと何かをブレンドしていることとは異なる。異物がくっついたもの、すなわちモンスターのような存在をつくりたいと思った」と意図を表現した。

またダニエル氏は、「最近ライブパフォーマンスに興味や問題意識がある」と話し、「きちんとした注意を払って聞くような本のようなアルバムにももちろん興味があるが、なぜライブかというと、遊園地のアトラクションのようにクラクラする体験を提供するから」という。「何が起るかわかりきっているものよりも、何が起るかわからない点に面白さを感じている」とも述べていた。

続いて樋口氏から「ダニエルにとってワンオートリックス・ポイント・ネヴァーとは何か」と抽象的な質問が飛ぶと、「意識すると、コンピューターの持つトリック性を永遠のものにすること」だと答えた。さらに、「音楽を体験すること」は「ものすごく大きなイリュージョンである」とワンオートリックス・ポイント・ネヴァーの音楽の核心を語った。さらに、先に述べた「コンピューター」あるいはテクノロジーについて、「コンピューターでの作曲のいいところは、シンフォニーの全てを一人で構築できること。私が SF を好きな理由は、タイムトラベルで歴史を飛び越えながら、世界の全体像を知ることができるからだ」と話し、「自分が魅了されているのは、一言でいえば世界なんだろうね」と、マクロな視点を交え、語っていた。



○登壇者 プロフィール



ダニエル・ロパティン | DANIEL LOPATIN

ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー／アーティスト

1982 年生まれ。米ブルックリンを拠点に活動するアーティスト。ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー名義で活動し、Warp などさまざまなレーベルから作品を発表している。FKA ツイッグスなど多くのアーティストとコラボレーションするほか、美術館でのマルチメディア作品展示も多数。音楽制作を手がけた映画『Good Time』は 2017 年のカンヌ映画祭最優秀サウンドトラック賞を受賞するなど、多岐に渡り活動を続けている。

ネイト・ボイス | NATE BOYCE

ビジュアルアーティスト

1982 年生まれ、サンフランシスコ在住。彫刻をベースに作品を発表し、国内外で個展の開催やグループ展への参加多数。ワンオートリックス・ポイント・ネヴァーとは 2010 年からコラボレーションを続けており、「We'll Take It」「Still Life (Excerpt)」のミュージックビデオを制作しているほか、ライブパフォーマンスでは彫刻や映像を取り入れた演出を担当している。変形スクリーンによって映像演出を手がけた最新コンサート「MYRIAD」は世界中で話題となった。



樋口恭介 | KYOSUKE HIGUCHI

SF 作家

1989 年生まれ。岐阜県出身、愛知県在住。早稲田大学文学部卒、現在会社員。『構造素子』で第 5 回ハヤカワ SF コンテスト大賞を受賞しデビュー。ワンオートリックス・ポイント・ネヴァー『Age Of』歌詞監訳を行っているほか、文芸誌および各種サイトに短編やエッセイなども寄稿している。



浅川哲朗 | TETSURO ASAKAWA

(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズ プランナー

1996 年から 2007 年までソニー・コンピュータエンタテインメント(現ソニー・インタラクティブエンタテインメント)で 1st パーティソフトウェアのマーケティングを主に担当。07 年以降はソニー・ミュージックグループにて音楽マーケティング業務に従事。現在はカナダ・モントリオールを拠点とするマルチメディア・スタジオ「MOMENT FACTORY」の日本展開にも関わっている。



若林恵 | KEI WAKABAYASHI

blkswن コンテンツ・ディレクター

1971 年生まれ。編集者。ロンドン、ニューヨークで幼少期を過ごす。早稲田大学第一文学部フランス文学科卒業後、平凡社入社、『月刊太陽』編集部所属。2000 年にフリー編集者として独立。以後、雑誌、書籍、展覧会の図録などの編集を多数手がける。音楽ジャーナリストとしても活動。2012 年に『WIRED』日本版編集長就任、2017 年退任。2018 年、黒鳥社(blkswن publishers)設立。



水口哲也 | TETSUYA MIZUGUCHI

Enhance 代表

ビデオゲーム、音楽、映像、アプリケーション設計など、共感覚的アプローチで創作活動を続けている。代表作に「Rez」や「ルミネス」など。独創性の高いゲーム作品を制作し続け、「全感覚の融合」を提示してきた“VR 研究・実践のパイオニア”でもある。06 年「Digital 50」(世界のデジタル・イノヴェイター 50 人)の 1 人に選出される。金沢工業大学客員教授、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科特任教授。